

変容するインドネシアの政治

2019年4月に実施されたインドネシアの大統領選挙で、
現職のジョコ・ウィドド氏が再選された。
長期安定政権の誕生となるのか。

(2019年11月15日開催、日外協特別講演会から抜粋)

立命館大学 国際関係学部
国際関係学科
教授 本名 純

長期政権で民主主義定着？

ジョコ・ウィドド(ジョコウィ)大統領は中部ジャワの出身。家具屋を営んでいた彼は、2005年にソロ市長に当選すると住民ファーストの政策を実行、庶民派リーダーとして注目を浴びた。12年にはジャカルタ特別州知事に。福祉サービスの充実や行政改革で人気を得ると、14年には大統領選に出馬し勝利を収めた。

インドネシアが民主化への歩みを始めたのは1998年。試行錯誤の連続だった。直接選挙で勝ち上がってきたジョコウィ氏は、まさに民主主義の申し子。今回の再選で、文民長期政権が確立し民主主義が定着したと国際社会も好意的な視線を注いでいる。

社会の分断がはっきりと

19年の大統領選挙は初めて議会選との同日実施。しかも、国会議員、地方代表議会議員、州議会議員、県・市議会議員の合計5つ。前代未聞の世界で1番「ややこしい」選挙であり、有権者数1億9283万人、投票所数81万3350カ所、キャンペーン期間8カ月間という「大規模な」直接民主選挙になった。

大統領選挙は前回14年のリターンマッチ。プラボウォ氏が再びジョコウィ氏に挑んだ。現職ジョコウィ氏には5年間にわたる鉄道、道路、空港な

どのインフラ整備をはじめ豊富な実績がある。国民の7割超が彼の政策に賛成している。だが、19年3月と4月に行われた直前の世論調査では、ジョコウィ氏に入れると回答した人の割合は50%台。政策への高評価が支持に結びついていないことが明らかに。とはいえ、プラボウォ氏支持は30%台。こうして4月17日の投票日を迎えた。投票率は前回の7割を上回る8割に達した。

結果はジョコウィ氏が55.5%、8560万7362票で勝利。プラボウォ氏は44.5%、6865万239票を獲得した。事前調査の数字と比べると、プラボウォ陣営が激しく追いつけたことが分かる。

多様性を重視するイスラム穏健派と、イスラム優位を主張する保守派が地域によってくっきりと色分けされた。「ジャワ西部の保守イスラム層社会」や「外島イスラム」はプラボウォ支持。一方、「ジャワ心臓部」「東部NU(イスラム穏健派組織)社会」やバリなど「非イスラム外島」では、ジョコウィ支持が強化された。

社会の分断化を深化させた大統領選挙



出所：講演資料を基に日外協作成